

エベス塚古墳発掘調査報告説明会

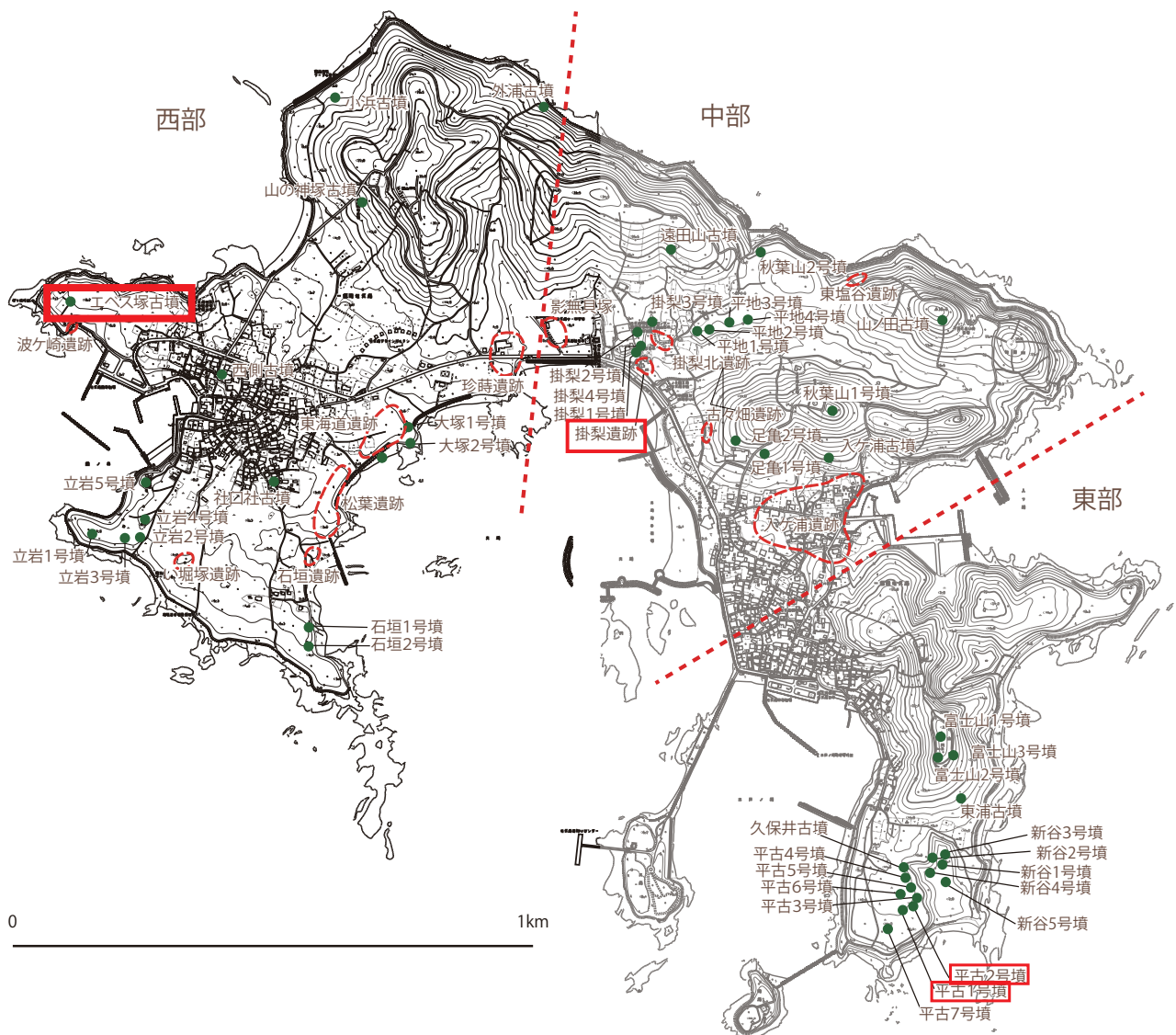
西尾市教育委員会文化財課

1 調査の経緯

西尾市教育委員会では、令和元年度から佐久島の遺跡の調査を継続的にを行っています。これまでに、平古1・2号墳、掛梨遺跡の発掘調査を行ってきました。

エベス塚古墳は西港近くの丘陵上に位置する島内最大規模の古墳で、墳丘上には横穴式石室の天井石らしい石材が残されています。これまで発掘調査は行われておらず、鎌倉時代に崇運寺を開いた僧の墓とする伝説があります。

本調査はエベス塚古墳の墳形や埋葬施設の確認を目的に実施しました。



佐久島遺跡分布図

佐久島には45基の古墳が分布しています。分布は大きく東部・中部・西部にわけることができます。東部・中部の古墳は、複数の古墳が近接して分布しています。一方、西部北側では、エベス塚古墳をはじめ山ノ神塚古墳・外浦古墳といった、単独で築かれた古墳が所在しています。これまでに発掘調査が行われている古墳はすべて横穴式石室をもち、7世紀代に築かれたことがわかっています。

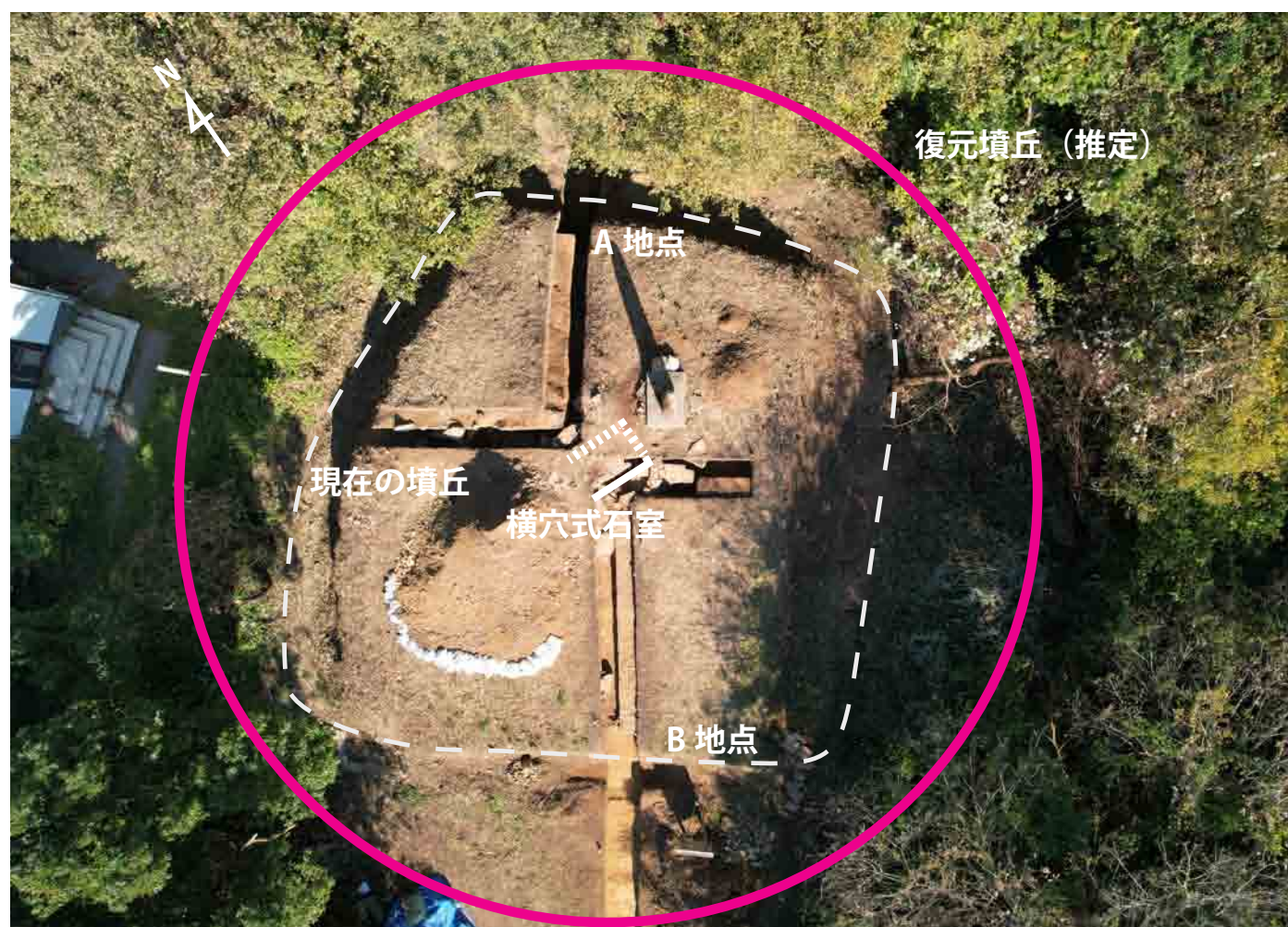
2 調査の成果

①墳丘

墳丘の現状は、周囲を開墾のために削り取られ、一辺約 15m の方形となっています。

調査の結果、古墳は当時の地表面の上に盛土を行って、築かれていたことが確認されました。墳丘の頂部中央付近では石室が見つかりましたが、天井石を含め石室の上部は失われた状態でした。墳丘の上部は人為的に削られたと考えられ、本来の墳丘は現状よりもさらに高かったと考えられます。盛土内には古墳時代前期の土器が含まれていました。古墳が築かれる前には、周辺で人が生活していた可能性があります。

古墳の周溝を確認するために調査区を設定したところ、表土を取り除くとすぐに地山面となり、周溝やその他の遺構を検出することはできませんでした。



古墳空撮写真



墳丘盛土確認の様子 (A 地点)



墳丘盛土確認の様子 (B 地点)

② 横穴式石室

墳頂部中央付近の表土を取り除いたところ、石室の天井と推定される石材が散乱した状態で見つかりました。天井石は原位置を留めていませんでしたが、これらの石を取り除くと石室下段の石積みが残っていることが確認されました。石室石材はすべて佐久島産泥岩が使用されています。

石室は奥壁と側壁の一部を確認することができました。石室は西に入口をもち、奥壁は小さな石を積み上げていることが確認されました。側壁はすべて長方形の大型の石材が積み上げられています。石室の入口は調査区外であるため、石室の規模や入口の構造を確認することはできませんでした。



墳丘頂部の表土を取り除いた状況



石室の調査状況

③ 副葬品

石室南東隅から須恵器（提瓶）・鉄刀・鉄鏃が出土しています。須恵器はほぼ完全な状態で奥壁付近から出土しました。鉄刀は3片見つかり、同一の刀だったと推定されます。鉄鏃は鉄刀の下から出土しています。須恵器は6世紀末～7世紀前初頭の製品と推定されます。



石室内部の遺物出土状況

④ 石棺

石棺は板状の佐久島産泥岩を使用した組み合わせ式石棺で、佐久島内では山ノ神塚古墳・平古2号墳・外浦古墳などで確認されています。また、とうてい山古墳（東幡豆町）・西川原1号墳（西幡豆町）でも佐久島産泥岩を用いた石棺が発見されています。石棺は蓋石が完全に残っていることから、未盗掘である可能性があります。側板の小口部分には小口石材を固定するために幅4cm、深さ3cmの溝が掘られています。

石棺の下にはさらに古い段階の床面が確認されたため、石棺は追葬時に置かれた可能性があります。



3 まとめ

① 石室は、多段積みの奥壁・厚さ10cmほどの板状石材を何段も重ねた側壁・西側に入口を持つ構造・墳丘の盛土を2.5mほど盛った上に築かれている点など、佐久島の他の古墳では確認されていない特徴をもちます。

奥壁を1枚石でなく多段積とする石室は、島内では秋葉山1号墳がありますが、発掘調査が行われていたため詳細な時期はわかっていません。これまで発掘調査が行われた山ノ神塚古墳・平古1号墳・平古2号墳などの奥壁はいずれも1枚石であることが確認されています。このことからエベス塚古墳は島内の他の古墳とは異なる系統の横穴式石室である可能性が考えられます。

② 石室内の須恵器や石棺が据えられた面を部分的に掘り下げたところ、下層からもう一面の床面が確認されました。この床面は古墳築造時のもので、須恵器や石棺はその後に追葬されたと推定されます。須恵器は6世紀末～7世紀前初頭の製品と推定されることから、古墳の築造は6世紀前半に遡ると考えられます。

③ 墳丘は周囲の土を盛り上げて全体を構築していることが確認されました。現状の墳丘は一辺約15mの方形で、高さ約3mですが、横穴式石室の位置や墳頂部の盛土が失われている点、墳丘周囲が削平を受けていることなどから、本来は直径20m、高さ4m程度の円墳であったと推定されます。古墳時代後期（6～7世紀）以降、古墳が小規模化していくなかで、エベス塚古墳は島内のみならず市内最大級の墳丘をもつ古墳であった可能性があります。

以上のことからエベス塚古墳は、佐久島に多数築かれた古墳のなかでも最古かつ最大規模の古墳と考えられ、被葬者は島内の最有力者であったと考えられます。6世紀には佐久島大浦湾奥部の掛梨遺跡では活発に塩の生産が行われていたことが確認されています。エベス塚古墳の被葬者と製塩活動を直接に結びつける出土品は見つかっていませんが、6世紀から7世紀にかけての佐久島の歴史を語る上で重要な手掛かりを得ることができました。